複刊第12号

国際女医会に出席して

マニラ総会

小野春生

第九回国際女医会総会は、昨年十二月三十日より本年一月六日までマニラで開催されました。

日本女医会からは、十九名が参加致しました。会議参加国は、オーストラリヤ十九名、オーストリヤ二名、カナダ四名、中華民国四名、デンマーク十名、フィンランド四名、フランス六名、ドイツ十一名、ホンコン一名、インド三名、イラン五名、イスラエル五名、イタリヤ八名、オランダ一名、ノルウエー十二名、南アフリカ一名、スエーデン十五名、スイス一名、タイ七名、英国三十五名、米国三十七名、ヴェトナム一名、及びフィリッピン二百六十八名と予報され、計二十四ケ国の盛大な会でした。

演題は「医師と親教育」、つまり医者が親を教育する必要性、そのために医者を教育する必要性、各国で何をしているか等、いろいろ演題に関係のある問題がとりあげられましたが、細かい点については日本女医会総会で報告を致します。

総会及び理事会では、会費値上げの件、会員一人二シリングが四シリング（約二百円）に値上げすることに定まりました。

今まで総会を四年に一度、その間に理事会を開催していましたが、次回より総会を一年おきに開催することになりました。マニラ会議は一九六二年度の集会になりますので、次回の第十回総会は一九六四年（来年）六月二十四日、ノルウエーのサンゲフョルドで開かれることになりました。議題は「慢性病の予防」と定まりました。

第十一回総会は、北アメリカで一九六六年九月上旬と定まりました。

国際女医会役員は、今まで四年で改選でしたが、今度二年の期間とし再選をゆるすことになりました。（副会長の件で、日本女医会会長の佐藤やい先生が立候補していらっしゃいましたがいろいろの事情で、インドへゆずることにいたしました）。したがって、この度の国際女医会会長は、フィリッピンのデル・ムンド先生、書記長は、ピーターソン先生、副会長は米国、オーストリア、イタリア、スエーデン、イスラエル、インド、オーストラリア、カナダの八名と定りました。又、国際女医会を地域別にWHOの分類により、ヨーロッパを北及び南ヨーロッパに、アフリカ、アメリカを北及び南アメリカに、東南アジア、東部地中海及び西部太平洋地域に別けることに致しました。日本は、オーストラリア、ニュージーランド、フィリッピン、ホンコン台湾、朝鮮等とともに西部太平洋地域に属することになりました。

フィリッピン女医会が、希望者の滞在費を全部負担してくれましたので、ノルウエーの女医会は、御礼の意味でフィリッピン女医会の推薦で、フィリッピンの青年を幾名かノルウエーの国際サマースクールに、お招きすると言っておられました。

とても国際親善にプラスになる御礼のやり方だと、感心して参りました。以上総会のお知らせです。

↑

岡崎豊子　小野春生　部世秀　フランケル女史　阿部　飯沼さち子　ルーブルスタイン女史　延島秀子　今井久子　野呂幸子　鈴木文子　黒田幽香子　森尾千枝子　仁川みどり子　森　吉辺佐和子　波田ヨ子　浦道子　三田露子　津田は

急告!!

一、一九六四年ノルウエーの国際女医会の旅行日程がほぼ決りました。東京出発は六月十二日、フィンランド、ヘルシンキで開催される世界医学会参加（六月十四日より十九日まで）その後六月二十四日より国際女医会出席、七月二十五日頃帰国する予定です。旅行、ホテル代だけで約百万円です。お申込みは、先着順ですので四月末日までに御願いします。マニラ会議にお申込がおくれたため、参加できなかつた方がいらっしゃいましたので、お早めに御願い致します。

（旅程）北極真夜中の太陽を見ながら

（フィンランド）（スエーデン）（ノルウエー）（デンマーク）（イギリス）ヘルシンキ—ストックホルム—サンゲフョルド—コペンハーゲン—ロンドン（仏）（ドイツ）（オーストリア）（スイス）パリ—ハイデルベルヒ—ウィーン—ジェネーバ—（ユングフラウ）—チューリッヒ—フローレンス—ローマ、南廻りで帰国。

二、英会話を勉強なさりたい東京及び近郊在住の会員の方へ!!

米国大使館婦人会の赤十字の方に英会話の指導をして頂くよう交渉中です。希望者の御申出により日時、場所等決定いたしますので三月二十日まで本部に電話で御連絡下さい。

此の会議が丁度お正月のお休みにかかりましたので、次々にパーティーが行なわれ、非常に盛大な歓迎ぶりでした。会議は、朝は八時からはじまり、会議のない日は七時半から予定がくまれておりました。元日にはタカイタイという東京でいえば、箱根のような所へ、又、他日にはロスバニョスの農業研究所へ、夜は大統領のマラカニヤング宮殿へ、又はフィリッピン女医会員の私宅へ、又はスタジオへと毎晩々々おそくまで御招待にあづかり、誰もが少々疲れてしまいました。しかし、フィリッピンの女医が力をあわせて五千万円余の資金を自分達で作り出し、あの大手を拡げての歓迎ぶり、そうして、少しもお互にいざこざもなく、スムースに事をはこぶあの姿には、本当に頭が下りました。これはデルムンド先生の迫力か、又はフィリッピン女医会長のロペズ先生の指導力か、又はフィリッピン女医各々の協力の精神かは

わかりませんが、いやな顔一つせずにそのにこにこした社交術の上手な事、又、団結力の強い事、胸を打たれると同時に、見ならうべき点が多々あるのではないかと反省させられました。

世界にけっして恥じる事のない国に生れ、立派な会員が三千人もいる日本女医会の一員として、何と私は幸福なのでしょう。日本女医会を世界に誇るべき立派な会になるよう皆が利己的な小さな感情をすてて協力すれば……と夢を見ながら帰って参りました。

国際女医会について

定方亀代

日本の女医協会は、吉岡弥生先生の御協力により、一九〇二年にはじめられましたが、国際女医協会は、先生が一九一〇年に組織して下さいました。

この頃、海外に御研究、御留学に御出になった先生方が数名ありましたが、日本女医史にありますように、皆様が国際的に活躍して下さいました。その後、特に国際的に認められた功績は、吉岡弥生先生と井上友子先生でありました。私が一九一四年にミシガン大学に医科を勉強するように招聘されました時に、米国の医師の方々は、御二人の先生方の行績に付き、称讃しておられました。日本の女医の働きが、国際的に認められている事を知り、嬉しう御座いました。

吉岡先生が一八八四年に、女医学校をはじめられ、一九〇一年に、東京女子医科大学を建設された事を称讃されておりました。私は、先生が外国でそのように認められておいでになる事を嬉しく思い、感謝に堪えませんでした。

井上友子先生は、医学を米国にて勉強され、小さい大学で学位を得られたので、日本に帰って働くのには、大きい大学で博士号を得てからといって、ミシガン大学医科三年に入学して、また医学博士号を得て帰国されました。

その後、学習院の校医として働かれました。米国の同窓会の方々も大変よろこんでおりました。

おしらせ

米る四月一日から四月五日迄、第十六回日本医学会総会が大阪にて開催されますので、この機会を利用して、日本女医会懇親会を催したいと存じます。四月一日か三日午後の予定ですので、奮って御参集下さい。

尚、詳細は分科会場に掲示致します。

戦後、進駐軍の方がミシガン大学の同窓として面会したいといわれ、お目にかかり、非常に有益な時を過しました。この時に世界の平和を皆でたもつようにしよう、それには、四つの条件がある。①言葉、②宗教、③科学、④子供、この四つの条件がそろえば、戦争は起らない、と申されました。私共は、この四条件を有し得るではないか、といわれました。宗教はキリスト教、仏教、神教、いずれでもよい。言葉は世界を通じて分ること、英語はそれに近い。科学は、私共は有している医科学であるから。私共は小児科であるから世界の平和を造る大切な四条件の一ッ、子供に常に接しているといわれました。この先生の御話により、世界共通という事を感じました。私共は国際女医協会を通じて、世界の平和をはかり、医学的に、なお一層進歩いたしましょう。

国際女医会々長
エイトケン女史等一行を関西に迎えて

川那部喜美子

去る十二月二五日、クリスマスの夜、九時二十分、大阪国際空港のゲートに、私は日本女医会大阪支部の幹部（浜田・富山・大原・橋本・中田）方とご一緒に、バラの花束でサンタクロースならぬ三人の女性、すなわち欧州からの賓客をお迎えしました。この方方は、国際女医会々長のジャーネット・エイトケン女史、ロンドン大学のローヤル・フリー・ホスピタル女子医学校々長キャサリン・ロイド・ウイリヤムズ女史、及びエディンバラのバクセンダイン女史でありまして、一行はマニラにおける第九回国際女医会総会に出席のみちすがら、日本観光の数日を関西で過ごすために、ハワイから羽田経由伊丹空港に直行して来られたのでした。

長途の旅にもかかわらず、空港から宿舎への車中、ラジオから流れる螢の光のメロディーに、最長老のエイトケン女史が早速に、オールド・ラング・サインの合唱の音頭をとられるほどのお元気でした。

翌二六日は、折柄京都南座で開演中の顔見世興行の打上げ当日でしたが、京都支部の長村、片岡両氏のご尽力で、入手困難と定評のあつた切符が幸運にも手に入りましたので、観劇にご案内いたしました。英国の三女史方は、なかなかの歌舞伎通で、雁治郎の席を喜ばれ、一、二時間の予定を変更してご希望のままに、とうとう昼の部全部お見せいたしました。又菰の内弁当がことの他お気に入り、割箸を使って召上り、なかなか息の合った観劇振りでございましたので、記念に大橋月皎画伯の出演花形俳優の似顔色紙を贈りました。

次の二七日は観光の一日を送られた夕に、食後の約二時間を宿舎京都ホテルの地下パーラーで三女史を囲み、大阪、京都両支部有志（長村、片岡、俵松繁氏等—京都、富山、橋本、簡氏等と私—大阪）で、ささやかながら歓迎のお茶の会を開き、交歓いたしました。

この度、一行の突然の来朝のお知らせは、東京の日本女医会本部から、大阪の牧野、大原両氏を経て私に電話リレーで届きましたので、早速に大阪、京都両支部幹部の方々のご協力を仰ぎ、一行の私的な観光旅行のムードを壊さぬような計画をたて、賓客達に喜んでいただくことができました。世話人といたしまして、皆様のご協力に心からお礼を申し上げたいと存じます。

エイトケン女史と私とは一九六〇年のバーデン・バーデンの国際女医会で初対面でしたが、バス遠足に隣席で話し合ったりしました。又、私達日本代表一行がロンドン到着の夜から見学に至るまで、まことに行き届いた望外の待遇にあずかりましたことは、何時までも忘れ得ない感激でありまして、この度わが郷土、関西にますますかくしゃくたるエイトケン会長をはじめ、印象深かつた女子医学校々長のロイド・ウイリアムズ女史や、エディンバラの優雅なバクセンダイン女史達をお迎えして、英国女医会の方々への感謝の一端を表わす機会を持つことができましたことを衷心から喜ばしく存じました。

このように、私達は日本女医会を通

→ マニラに飛立つ寸前
羽田空港控室にて……
キャサリン・ロイド・ウィリヤムズ女史

森　千鶴
竜　知恵子
吉岡　ふさ　佐藤やい
川那部　喜美子　ジャーネット・エイトケン女史
中村　酉子　バクセンダイン女史

名もご承知でした。シェクスピア劇との比較など話され、ことに花道に近い

して国際女医会に繋ることによって、自国内においても、外国一流の女医達に直かに接し、人間として、女医として、自ら感得するところは少なくはないと存じます。より広く、より心豊かな交流をもつ歓びをともにいたしたのでございます。

「国際女医会員歓迎会を終って」

中村酉子

外国は、今日ではもう必しも遠い存在とは申せなくなりました。しかも私達の祖国は世界の人々を惹きつける良きものを沢山にもっております。この自らの宝に深い関心をもたねばならないということについても又、この度強く感じたのでございました。

歓迎会プログラム
一月八日　午後一時
着物ショー
日本橋三越デパート五階貴賓室
挨拶　竜千恵子、通訳・山崎倫子
午後三時より五時迄
ティパーティ
日活ホテル六階、司会・小野春生
歓迎の辞　佐藤やい
通訳・中村酉子
日本女医会の歴史　室方亀代
国際女医会員代表挨拶
Dr. Haldersen
余興　日本舞踊　及川富美子

欧州各国の代表より成る国際女医会員七五名の団体は、マニラにおける総会の終了後に観光の目的で日本を訪問されました。

此の意義あるまれな機会に日本女医会では、各国女医の親睦を深め、国際親善をはかる為に歓迎の一日を開きました。

スケジュールに依ると、一月七日夜遅く羽田に到着され、二班に分れ、一つのグループは東京を中心にだけ滞在され十二日に帰国、他のグループは関西地方にも旅行され、十六日に帰国されるというぎっしりとつまった旅程でした。従って旅行社と交渉の結果、訪日早々の一月八日を歓迎の日にあてました。此の日のため、総会に出席されていた小野春生先生は、日本代表の皆さん達より一日早く帰って頂きました。しかし、一行の日本到着時刻が変更になり、一月八日午前二時二十分となりましたので、深夜のため、大勢で御出迎えはひかえて小川さんと私と二人で羽田空港に参りました。これより三時間前、小野先生は無事に日本代表の大任を果され帰って来られましたが暑いマニラで連日の活躍を物語るかのように大分疲労された様子でした。私共は待ち構えていたNHKテレビ班の人々との応答に忙しく、一行の空港到着までに時間はまたたくまに過ぎてしまいました。

国際女医会員の皆様は旅の疲れも見えず元気一杯な姿で到着されました。日本女医会長からの美しいカーネーションの花束は、国際女医会の副会長の一人であるイタリーのピラミ女史に贈呈され、御一同は、ほんとうに嬉しそうな面ざしで挨拶をかわし、直ちに帝国ホテルへと向われました。此の時の状況はテレビで御覧になられた方も多いかと存じます。充分な睡眠をとるひまもなく一月八日十二時四十五分には帝国ホテルより二台のバスで三越本店の着物ショーに御案内致しました。三越の玄関には日本女医会員をはじめ三越の方々が賑々しく出迎えられ、エスカレーターで五階の会場に参りました。此の着物ショーは一般の観光外人客は誰でも見られるというものではなく、三越が日本女医会の申し入れに対し、特に好意を示し、開いて下さったものです。優雅な訪問着、あるいは華麗な花嫁衣裳に感嘆し、写真を撮るシャッターの音がたえませんでした。お茶とプディングのおもてなしをうけ、残った僅かの時間で三越内の見学を終り、買物をするひまもなく、バスで日活ホテルに参りました。会場には日本女医会長及び副会長の諸先生方が立ち並ばれ、一人一人に握手をかわされました。ティパーティは小野先生の司会のもとにはじまり、佐藤やい先生は歓迎の辞を述べられました。その要旨は次の通りです。

→於　日活パーティ会場で会長挨拶をききいる一同……

『総会でのテーマは、世界各国共通の課題として各国の現状をもととして互いに研究を重ねられ、相互の知識の交流をはかるところに意義深いものが多々あったことと今後期待される次第でございます。一方、此の機会に我が国をも御訪問され国内各地の観光より我が国の過去、又は現状をもよく御諒解頂き、今後ますます親交を深め、互いに女医の立場において、広く世界人類の為に貢献致し度いと存じます。』

続いて日本女医会の歴史を簡単に定方先生より説明して頂き、故吉岡弥生先生の功績をたたえられ、丁度御出席の竹内茂代先生を皆さんに御紹介されました。次に欧州の女医さんからの御挨拶をノールウエーのDr. Haldersenに御願い致しました。女史は『日本女医会がこんなにあたたかく歓迎会を御開き下さいまして、此の上もなく嬉しいことです。又、マニラでも連日、大変なおもてなしをうけました。来年の六月の総会はノールウェーで行なわれますが、日本からもどうぞ大勢御出席下さい。

ノールウェーでの会議は、一生懸命に勉強し合って意義のある会に致し度い。』と抱負を語られました。

最後に余興として及川先生が、日本舞踊〃柳の雨〃と〃春雨〃を踊って下さいまして皆様に大変な御好評を頂きました。お帰りには記念品として日本女医会の名前を染めぬいた風呂敷を差し上げました。

ティパーティーには日本女医会員の中から、英語、フランス語、ドイツ語を御話しになる方々を総動員し、御接待にあたり、終始皆様はなごやかな雰囲気のもとに歓談され、大盛会の裡に終りました。

御滞在中には、日本女医会員の御案内で、各自御希望の医療施設等の見学をなされ、聖ルカ病院及び東京女子医大病院には、多勢の方達が御出になりました。私共は、此のような多くの外国のお客さんをおもてなしすることは不馴れでしたが、欧州の女医さん達は、日本女医会員御一同の御親切を心から感謝され、名残りを惜しんで日本を去られました。

会を終り痛感致しましたことは、私共は、ますます外国語の習得にはげみ世界各国の女医との交誼を深め、意見の交換を活潑に行ない、日本女医会の発展に努め度いと存じます。

フィリッピンマニラ会議雑感

（一）　野呂幸枝

マニラで開催された第九回国際女医会の次第は小野先生から詳細な御報告があるでしょうから、私は日本女医代表の一員として、参加させていただき、印象深かった事、あるいは予想外であった事などを少し書いて見たいと思います。もち論、わずか十日ばかりの旅ですから、ごく表面的な観察であったり、誤って理解をしている点もありましょうが、とにかく私はこのように見、このように感じて来たのでございます。

〃国際女医会総会というもの〃

国際女医会では、他の学会では取り上げないようなテーマを論ずるのが慣例であると聞いていましたが、全くで、親教育というテーマーも又、討論会の運営とか話の内容とかも、私達が日頃経験している医学会とは大変違っているのに戸迷いました。医学的社会学（社会学的医学ではなくて）と申し度いような感を受けたのでございま

す。医学が社会の平和発展に寄与するためにはこのような話合いも有意義でありましょうし、又、私達女医の活躍する分野も、このような話合いを通じて、より拡がることでしょう。

一方、医学の専門的な目から見ますと、半ば素人のような話だと思うようなことが盛んに討論されている場合もございました。

〃フィリッピン人の対日感情〃

出発の前、皆様から御心配いただきました対日感情は、私達が接しました人達ではとても親日的でした。明るくて、派手好きなマニラの女医さん達から、想像もできなかったような歓迎に会いまして、私自身、少々上調子になり過ぎたと反省されるほどです。郊外へのバス・ツアーとか見学の時は手をつないで歩いたマリヤ・レオさん、私達のスケジュールをちゃんと知っていて、自由時間に迎えに来て下さったリベラ氏、嗄声でお饒舌で強引に私を家庭に連れていったカストロさん、私のおぼつかない英語を流暢な英語に通訳し、私達二人はよくお話し合えますネ、と喜び合った人……、日本に帰った今もなお、なつかしく思い出す人達の何と多い事か。もえるようにあざやかな花や、珍らしい風味を舌に残したパパイヤなども忘れ難い思い出ですが、それ以上に愉快な彼女や彼氏の印象の方が消えないでしょう。

こんな時もありました。「私達は日本人と同じ肌の色ですが、太陽が強いから少し黒いのです。」とあるフィリッピン女医さんが申しましたので、私は、「私も同感です。私達日本人同志でも、寒い北海道の方は、私よりもこんなに色白でしょう。」と申しますと周囲の皆はワッと手を打って喜ぶのでした。

肌の同色であるという近親感からか、日本に対する憧れのようなものを持っているのか、二十年前の日本人を知っている人達のこの様子を見て、私達現在の日本人は深く考えなければならないと思います。

〃女医の社会的地位〃

四つの医科大学では、学生は男女半々で、女性の教授もかなりあるようです。大統領夫人が女医でいらっしゃる為か、あるいは国を挙げてこの女医会に協力しているためか、何と女医さんの威張った国だろうと思いました。個人的には三軒ばかりの家庭に招待をうけましたが、いずれも立派な家でしたので、この人達が日本に来られた時に、私の家へお招きできないし、と取越苦労をしているほどでございます。

健保の改正、値上げ運動と年中さわがしい日本の医者と大変な差があるようです。

〃病院と患児〃

休暇中でもあり、盛沢山のスケジュールで落着いた自由時間がなくて、大学、研究室など見ることができなかったのは残念でしたが、デルムンド会長の小児病院と、セント・トーマス大学の附属病院を見学することができました。病院は美しく、スッキリとできているが、その設備は取立てていうほどのものはありませんし、臨床検査室など貧弱で、実に閑散としていたようです。

私は小児科医、やはり子供が目につきます。小児病院は二〇〇ベットほどで、気温の高い土地柄、調度品とか壁は寒色の青系統が多く、壁画も描かれて楽しくなるような、美しい病院ですが、新生児も各種の疾患の子供達も皆黒く痩せて目が大きく、日本の終戦直後に道端で見たような子供ばかりなのです。大学病院でも同じような姿を見て、三ヵ月児かと尋ねると六ヵ月児、一才かと尋ねると二才と答えるほど小さくて栄養不良の子供達の姿は、病院が美しいだけに余計に印象的でした。その後、大学病院で渡り廊下を隔てた病棟を見て、やっと理解できました。この栄養失調症のような子供達は施療患児（チャリテーペイシェント）だったのです。

フィリッピン人は大体痩せて小さい人が多いようですが、新生時の生下時体重は三〇〇〇瓦で、ふっくらとした可愛い赤ちゃんが普通なのです。大学病院でも施療患児のみ二〇〇床の病棟を建築中でしたし、生れながら栄養状態の悪い子供が多いことから、この国の一面が眺められるように思いました。

〃旅をおえて〃

美味しい果物、どうも頂けないフィリッピン料理、華やかなバタフライ・ドレス、綺麗な街と道路、凌ぎ易い暑さなど話題は尽きません。

あわただしく香港を通り日本に帰り着き、タップリとしたお風呂に入った時、やはり日本はいいなあと思わざるを得ませんでした。多少の犠牲を払ってでも海外に出て見ること、外人と接することは、日本人を自覚し、日本を知る最良の方法であると痛感し、この旅行のチャンスを作って下さった日本女医会に感謝している次第でございます。

（二）　阿部秀世

昨年十二月二九日午前十時羽田空航出発、四時間にてマニラ空航着。空航にはフィリッピン女医会々長デルムンド女史始め多数会員の方々の丁重な出迎えをうけました。一同、サンパギーターという香り高いフィリッピンの国花でつくられたレイを首にかけられ、新聞社写真班のフラッシュをあびて日本女医会代表者と呼ばれた時は大いに緊張した第一歩でした。

日本では師走の寒風におくられ、四時間後は摂氏三十二度という真夏のマニラに降りたち、予期通りとはいいながら、その急変に僻易し、冷房のホテルに落ちついてやっと一息という場面でした。

当日は、小野先生が早速日本大使館に御挨拶においで下さって、他は各自、自由行動。

翌三十日は朝八時フィラムライフという立派な会場に行き、登録を済ませ引続きバスに分乗、マニラ市内各大学見学後、フィリッピン女医会館訪問、ついでマニラ市隣接のクエゾン市の小児病院見学、この病院は新設されたばかりで諸設備はなかなか調っていましたが、入院中の子供達は、日本では見られないような栄養不良児の多いのには驚かされました。これはフィリッピンの貧富の差の大を物語り、又、社会保障の貧困さ等に起因するのではないかと感ぜられました。

まだ社会保険制度もなく、目下現厚生大臣が調査研究中との事でした。とに角マニラ市内には、終戦直後東京でも焼け跡に建てられたバラックの住居が点在し、はだしの子供達が街頭にたち物を売っており、一方富豪は大邸宅をかまえ広い庭内には緑の芝生、立派なプールを持ち、何百人の客人を接待して余りある豪華さとは余りにも開きある感を深くしました。

医師の地位は、アメリカと同様非常に高い事は日本とは比すべくもないと思われました。

現大統領夫人も女医で、それによってか十二月三十一日開会式終了の午後大統領夫人招待のティーパーティーがマラカニアンパレスというスペイン領時代に建てられた豪華な宮廷で開かれ、大統領夫妻及び家族の方々も出席され、大変賑やかなパーティーで、各国別に夫妻をかこみ、記念撮影をする等、誠に想い出深い御招待を受けました。日本大使のお話では、このようなことはこれまでに例を見ない歓待だとのことでした。又、開会式の際は玄関で軍人の捧銃による出迎えを受け、各国国旗掲揚に当っては礼砲をうつという、まさに国賓待遇の感を受けました。

元日には米軍人墓地を経て風光明眉なタガイタイに案内されタール湖畔の眺望を満喫し、夜は又各自別々に医師の家庭に招待され、大変親しみのある家庭的な雰囲気に接しました。一月二日からいよいよ討論会が始まり、午前中は親教育と医師との関係について、各国代表者の意見発表があり、午後は六グループに分れ各専門部門の討論が行なわれました。

一月三日も大体同様な順序で討論会が行なわれ、スピーチは英語と仏語で英語による発表は大体理解できるのですが、さて、こちらの意見発表となるとなかなか意のままにならず、誠に残念に思われました。理事会の決議や討論会についての詳細は、小野先生から御報告がありますとの事で省略させて頂きます。

来年六月にはノールウェーで、又、一九六六年にはアメリカで、次々開催されるこの国際会議には自由に英語で討論できる方が一人でも多く出席して日本女医の為に活躍して頂きたいと念願致します。将来はこのような方には補助金でも出して出席できるように何かよい方法を構ぜられたいものです。又、この国際会議には会長、副会長の先生方に交代にでも出席して頂く事も必要なように感じました。

次に参加会員は外国に出ますとやはり日本女医会の代表者と見られる事を自覚し、又、団体行動に充分協調して慎重に行動して頂きたいと考えます。

終りに小野先生には団長として対外

的に御多忙な上に不馴れな私共参加者の為に大変お骨折りをおかけしました事を心から感謝致します。

（三）　森田キヨ

フィリッピンマニラ市において開かれた第九回国際女医会大会に参加すべく私達十九名の代表は、あわただしい師走の街を羽田空港へ急いだ。空港ロビーは送る人、送られる人でしばらく華やかにざわめいた。やがて私達はパスポートの検査出国の手続きをし、搭乗機エァーフランスの前に並んで記念撮影をし、ターミナルに並んで手を振る人達に応えながら機上の人となった。十時三十分飛行機は正確に離陸した。相模湾を右に遙かにかすむ富士の嶺を見ながらやがて飛行機は南に機首をとった。行程四時間のマニラを目ざして真しぐらに。身のまわりを整理し軽い食事を摂りうとうとと眠りを催そうとする頃、うす緑色の海面にくっきりと海岸線を浮き出した島かげが白く流れる雲の間から見え初めた。これがフィリッピンか。私は瞬きもせず下を見下ろした。赤い山肌、繁茂した樹海、よく耕やされた農地、点在する民家、これは此の島に限った事ではない飛行機に乗った人であれば誰でもが見るごくありふれた風景に過ぎない。しかし私には瞬間、炸裂する砲弾、鼻を刺す砲煙、叫号する兵達の声!!　私は目を閉じ耳を覆った。しかし、しばらくして再び見下ろす風景は静寂そのもの平和な姿であった。間もなく機内アナウンスあり、間もなくマニラ空港につきます。地上温度は三十度ですと。私は一遺族としてではなく国際女医会出席の一女医であるとの意識によびもどされた。

空港にはドクトル・デルモンド他二、三の代表が私達を迎えてくれ、白い小さい香り豊かな花をつないだレーを一人一人の首にかけて呉れて歓迎の意を表してくれた。この花の名はと問うたら、サンバギータと答えた。これは比島のナショナルフラワーです。と説明してくれた。

私達は一同バスで宿舎に当てられたホテルフィリピーナスに向った。沿道ヤシの並木名も知らぬ赤い花が鮮かに色どり、左側に広がるマニラ湾はナポリの海のような澄んだ碧さはないが、遠くコレヒドールの島が霞み、海辺に貝を拾う婦女子、明後日に正月を控えて裸で水に戯れる子供達の姿、三三五五連れ立って堤防のあたりにピクニックしている風景を見る時、遙か南に来つるかなの感を強くした。マニラのバスは私共にはいささか乱暴と思われるほどスピードが早く、冷や冷やしたが道幅が広く道路がよいせいであろうか。外気三十度のマニラもホテルの室内はエァーコンデションがよく効き、ボーイも親切で気持ちよく、食堂のボーイ達も片言の日本語で旅行者の気分を和らげようとしている様子が見えて快いものであった。比島の日本に対する感情がまだ良好ならずということで一同言動に注意しましょうという事であったが、皇太子夫妻の親善旅行の直後であったためか、町で会う人達も白い目を向ける事はなく、特に女医会の人達は友交的に気持よく迎えてくれた事は有難い事であった。

三十日一同登録を終え、日程に従って会議が進められた。この間会場に当てられたフィルミナライフでの食事も各国の人達入り交り国際会議にふさわしいインターナショナル風景であった。

中庭は熱帯樹茂り、白い花、赤い花が鮮かな色彩を添え、池には噴水、池中には恐らく日本からのものと思われる真赤な金魚が可愛らしい魚と仲よく游泳していた。会議場に当てられた講堂もなかなか立派なもので、万国旗国際女医会旗が飾られ、室内のエァーコンデションもよく効き、時折は三十度の外気に暖をとりに出て行き度くなるほどであった。一般医と親教育という議題も、一般常識的なもので、子女と性教育の問題が時節柄主論となったようである。会議の余暇はすべて歓迎接待、朝野を挙げてのもてなしにただ驚くばかり、マラカニヤン宮殿へ大統領の招待、最高裁判官の招待、名士諸侯の招待、テーパーテー、デナーパーティ、ダンスパーテー、さては各個人が家庭の招待と息のつくまもない位、最後の閉会式に至ってはその極に達し、各国大使臨席、軍楽隊附きの豪華なもので、深更十二時に至るまでの、けんらんたる絵巻物を繰り拡げたようなもので、今思い出しても現実のものであったかと、我と我が記憶を疑い度くなるほどのものであった。

私はこの間多くの日本兵が散ったモンタルバンの山を訪ねる機会に恵まれた。たまたま大会中に知り合ったフィリッピンの若い女医さんにモンタルバンを御存じかと聞いた。けげんな顔をして、知っているが、何か用かと問うた。私の主人及び沢山の日本人がモンタルバンの山で戦死した。私は此の機会に山を訪ね度いのだと答えた。彼女は目をうるませながら六日の午前九時ホテルへ迎えに来て、山へ案内してくれる約束をしてくれた。

五日の夕方、私共一行は日本大使御夫妻から招待を受け官邸へ急いだ。私共は思わず歓声を発して喜んだ。というのは、大使御夫妻の思いやりある接待は、日本のお正月料理であった。毎日馴れない御馳走にいささか日本恋しくなっていた折も折、刺身、数ノ子、栗きんとん、黒豆、こぶまき、なまこに加えたお雑煮までも添えたものであった。思いもかけぬお正月をマニラの大使公邸で迎える事ができた私共は、涙の出るほど嬉しく、腹一杯に御馳走を頂いたのである。

翌六日、これは女医会とは別に、私にとっては誠に感激の日であった。午前九時迎えが来るというのに、夜も明けやらぬ内から起き出して山への仕度をした。前夜、大使公邸から今日のために頂いて来たお正月料理は逝きて十八年訪ねる人もなく異郷の地に眠っている人達への何よりのお供物であったからだ。九時少し前、ホテルの向いの花屋が店を開けるのをおそしと店に入って行き、白と赤のガーベラが見事に盛られてある一鉢を買い受けた。ほどなく女医さんは、学校の先生をしているという姉さんの運転で私を迎えに来て呉れた。それと前後して大使館の井口書記官御夫妻が当着した。私は皆様の厚意により十八年振りの面会ができるような興奮を押えてリサール州モンタルバンへ車を連らねて走った。

マニラ市東方一時間余走った時、平和な小さなモンタルバンの町についた。まず町長に面会して来意をつげ、町長の厚意によって町の巡査部長が案内役として同行して呉れた。町を出て三十分余り走った。日本の田舎道と何んの変りもない山道である。日本の兵達もこの道を通った時、故里の山河を偲んだ事だろうと思えば、景色も涙でボーとかすむ事しばしば。

やがて石がゴロゴロとある川原に出て道も行止りとなった。（ここは今、日本の賠償で造るマリギーノダムの予定地である。）

沢山の日本兵は、ここで戦死しました。この川にも山の奥から沢山の死体が流れて来ました。川を挟んで左右の山の峯伝いに、又この川に添って日本兵は山へ山へと入って行きました。ここで拝んだらいいでしょう。そしてきれいな小石を一つお国に持ち帰りなさい。といってくれた。

女医さんは山へ来る途中、自宅に車を止め、年老いたお母さんと妹弟を便乗させ、一家五人での応援振りであった。この年老いたお母さんも、戦争中は私の家に五六名の日本兵が泊っていた。その内の一人は自分の顔が国に残して来た母の面影によく似ている、と何時も懐かしげに話していたと。人種が異なり、風俗習慣が違っても、人情に変りない事が感じられ、ただ感謝の涙にむせぶばかりであった。

私は川原のほどよい石を墓石とし、前夜頂いて来たお正月の御馳走を供え花を手向けて冥福を祈り、最後に珠数を墓石の下深く埋めて賜物とした。

平和に馴れ、最早いたいたしい戦争の事も忘れようとしている今日、幾星霜春秋を残して異国の地に眠り、誰一人訪れる者とてない多くの人達を更めて涙を流し、合掌して冥福を祈る人があった事で幾千万の霊が安らかになってくれた事と信じている。私は「たとえ骨肉が異国の地となっても魂は私と一緒に祖国へ帰りましょう。お父さん、お母さん、妻が子が待ちあぐんでいる故郷へ一緒に帰りましょうと、声にはならぬ声で呼びかけたのである。

私共は前々日、アメリカ兵の墓地を観光の折訪ねた。一人一人大理石の十字架に名前を刻み、見渡すかぎりの広々としたきれいな墓地であった。それに引きかえ、あまりにも無い、なんにも無い、野の花さえも咲いていない荒れた山に、せめて一本の慰霊塔でもかまわない、一日も早く建てられる日の早かれと祈らずにはいられなかった。

私は又、この間フィリッピン金の星会長（戦争未亡人会々長）バジリヤ・M・バジヤ女史及び幹部の方々と逢う機会を持つことができた。彼女達は私のホテルを訪ねて来られ、頬ずりをし

て親愛の情を表わし、沢山のおみやげを下さった。この中には、プリンセス美智子への依頼の品まであって一寸面喰らうという一駒もあった。これは、大使館を通じて御届け願うよう取り計って来た。此の度の比島旅行は決してただ楽しかったというものではないが、いままでのどの旅行にも増して意味深い有難いものだった。

マニラ大会は医学的な探求ということよりも、むしろ国際親善の意味において役立ったような気がするし、又、それでよかったのだと思っている。

七日早朝香港へ向うべくホテルを後にした。一時間で着いた香港は数年振りの寒波襲来とて真夏の国マニラからの旅行者達は身ぶるいしながら市内の観光に出かけた。中共からの避難民で急激に人口が増加している由、豪華な華僑の大邸宅のすぐそばにドヤ街のような貧民窟がぎっしりと立ち並んでいる風景があまりにも対称的で見る者の心を暗くした。

九日朝私は一行と別れて台湾に飛んだ。三十年前別れた友の熱心な勧誘によってである。空港に下りるや大声で呼ぶ友の方へ私は小走りに急ぎ手を取り合って再会を喜んだ。手続不備のため、七十二時間の滞在がゆるされただけであった。私は短い期間にできるだけ多くの人達に逢い、できるだけ多くの事を直かに感じ取り度いと思い、台北、台南、高雄と走りまわった。

台湾の各地で心温まる歓迎会を開いて頂き、友あり楽しからずやのなつかしさしきり、彼女達の日本への追慕たるや又切なるものが感じられた。私の肌に感じた台湾は何かしら暗く、きびしいものがあるようだった。戦時体制というせいかも知れない。平和こそ!! 平和こそ!! と心に深く念じないではいられなかった。

十一日、十一時半台北をあとにし、三時間の後、私は無事に羽田空港につき、私の旅行は終った。

関西会員諸姉の活動ぶり

大村ひさゑ

年末から年頭にかけて我が女医会もすっかり国際色にぬりつぶされて……という書き出しの橋本恵美姉の私信で、今更のように大阪を中心として、いや川那部副会長指揮による関西会員諸姉の華々しい御活躍ぶりに頭が下るのみであった。

この文中の主なものとを抜萃させていただく。

クリスマスの夜、エートケン国際女医会々長を伊丹に迎えてから、京都ホテルで有志でのパーティー。

一月八日には、関西を代表して東京での日活会館においての歓迎パーティーに参加。

一月十一日、都ホテル宿泊の一団に京都の情緒を充分味わって貰うべく会員が踊りまでして旅情を慰めた。

十五日、十六日の二日間は、特にドイツのウィマース女史を観光に、ディナーにと案内して、ドイツの医療についてなど懇談。

二十一日には最後の夜として大々的にディナーに招待して、非常に感謝された。等々。

これこそは日本女医会、東も西も一丸となっておのがじし内に外に誠意を披瀝しての美しい努力の姿ではなかろうか。

× × ×

× × ×

福井県支部会報告

十一月二十三日。山中温泉山水閣にて開催。

当日は本部より、竜智恵子副会長御出席の御承諾をいただいておりましたが、御健康上の理由で、佐堂とき理事が代理御出席下さいました。はるばる石川県まで遠征いたしました関係と折悪しく当日は北陸特有のみぞれと暴風の悪条件が重なりましたが、それでも十三名の出席者を得て、まず温泉で暖を取り、丹前姿で会食しつつ座談的に会を進行させました。

一、会計報告

二、評議員会報告(中村先生御出席)

三、総会報告(八木貞子先生、富樫澄子先生御出席)

四、佐堂理事を中心に支部会のあり方、及び本部と支部との関連性についての話合い。

要点。支部会に共通性がなく、集まりが悪い。

親密感のわく一つの雰囲気を形成するまでは、親睦を第一の目的とし社会人としての立場を向上させるべくお互に努力し合う。又、支部会の団結力の如何が直接本部の発展に影響するが、本部に「すばらしい何物か」があればもっと親密感がわくと思う。支部は本部の補助機関だけではいけない、等。

交々の意見交換の後、佐堂先生も両者交流のかけ橋になり、尽力をおしまないとお約束下さいました。

希望。支部会開催に際して本部は、講師の斡旋に応じてほしい。

評議員会出席者への旅費支給。

五、臨床的体験談

珍らしい症例、失敗談など続出。話は尽くる事なく時間のたつのを忘れてクランケから開放されたくつろいだ気持で半日を楽しく過しました。

日本女医史のその後

女医史刊行のことについては、会員の皆様に一方ならぬ御支援にあずかりました。御かげ様で昨秋その成果をみることができました。私共編集員はほんとに苦労と心配をいたしました。あれほど声を大きくして叫び、あれほどアッピールしたのに、さてできばえはどうかと思いましたが、できばえについては大方の人々から「よくもでき上った」「よくも資料を集め得た」「文章が優美だ」「非常に面白い」「これは大いに自慢に値する」などと御好評をいただいています。おかげ様で初版千部は今はもう残りすくなくなりましたが、一人でも多くの人に見ていただきたい、医人の外の人にも興味があるから見ていただきたい、と思うのが私達刊行責任者の心でございます。どうぞ一典でも多く御購入いただきたく、又御宣伝願いたく、これが私共の切なる願いでございます。(福田幹子記)

逝去 謹んで御冥福を祈ります。

中原蓬氏　二月一日老衰のため逝去
享年八十九才、自宅(山口県大津郡三隅町豊原)

紫藤三千代氏　昭和三十七年死亡。
高知県高知市愛宕町二ノ八〇

編集をおわって

二月は逃げてゆく、とは昔からいわれている言葉ではあるが、今年は正月だってまったく瞬く間に過ぎてしまった。これはそれより前の暮から無精にせわしかったからかも知れない。

「節季おんなに盆坊主」まことに歳末は女の目のまわる季である。に加えてわれわれには昨年十二月七日の椿山荘の歓迎パーティー(これはマニラ開催の国際女医会に出席の米人女医八名がその途次を日本に立寄ったためのものである)をきっかけに、二十二日には正月に外人を迎えるための相談会。二十八日には日本からのマニラ出席会員の歓送会、二十九日には空港への見送り、また同日は空港で米人国際女医会長エートケン女史の迎送の一時。一月八日にはいよいよ待望? の外人の来客、二十七カ国、八十有余名の外人女医がマニラの帰途を日本観光に立寄るのを迎えてのパーティーである。日本女医会名入りの風呂敷を土産にと差出せばアリガト、サヨナラの即席社交辞令の連発というムードをかもし出すという盛会ぶり。

そしてまたこのほとぼりのさめぬうちにとて十一日にはマニラ以来の種々雑多の事項整理の理事会開催等々、佐藤会長はじめ役員諸姉の繁多さは、日本女医会の事のみでこの通りである。その中で玉稿をいただき得たのである。感謝のほかはない。

ただ、森田姉の異国における荒土の墓参記は涙とともに読了したが、しかし日本女医会員なればこそできた立派なこの墓参、せめてものお慰めとしたい。(大村記)

× × ×

× × ×

昭和三十八年二月二十五日印刷
昭和三十八年三月一日発行
編集人　福田幹
発行人　日本女医会
発行所　東京都新宿区市ケ谷河田町19
印刷所　東京都港区麻布田島町63
福田印刷株式会社